

地域と市民が担う国際協力 途上国支援の経験を共有する



フィリダ・パーヴィス
Phillida PURVIS

リンクス・ジャパン代表

フィリダ・パーヴィス●大和日英基金の副事務局長、日英21世紀グループの事務局長を歴任後、日英の非営利、非政府の交流を促進するための組織としてリンクス・ジャパンを設立。現在、同団体の代表のほか、国際難民基金の理事、青少年の国際ボランティアを推進するGAPアクティビティの評議員を務める。ロンドン中心部の日本文化のコア施設ジャパンアリーナプロジェクトの事務局長も兼務。ダーラム大学で神学を学んだあと、ロンドン大学東洋アフリカ研究所で日本語を学ぶ。その後、英国外務省職員、東京大学研究生として日本に滞在。大英勲章 (MBE) 受賞

これまで世界のあらゆる場所で地域社会を活性化させてきたのは、自分たちに影響を与えるさまざまな決定に、もっと深く関わりたいという人々の熱望である。かつては行政やエリート専門家集団の領域とされていた国と国との関係において、草の根レベルの担い手が新たに参画するようになってきた。

この担い手の拡大には、技術の革新が決定的な役割を果たし、特にITを利用して、学校間、あるいは芸術家、スポーツ選手、学者、さらには一般の人々の間でも、国境を越えたネットワークが可能になった。

これまで何年もの間、EU内で活動をともにしてきたヨーロッパ諸国が得たすばらしい成果の一つは、まさにそうしたそれぞれの分野で、ヨーロッパとほかの国々や地域とのネットワークが形成されたことである。1990年

代までは、ヨーロッパと日本の関係は、EU加盟国である各国と日本の二国間ベイスで展開し、より複雑な問題に対処するときのみ、欧州が一丸となって日本に当たるということが多かった。

「2005年日・EU市民交流年」は、各地での日欧交流の新たな機運の高まりを受けてのものだが、同時に、EUのさまざまな交流の主体が政府から非政府へ拡大し、その内容も前向きで文化的なものへと広がってきたように、EU自体の成熟度が増したことの反映でもある。「日・EU市民交流年」という特別な年にあたり、交流事業や連携活動が実施されているが、こうした交流年も初めての試みであれば、これほど多くの交流行事が開かれるのも、また初めてのことである。



コミュニティ主導の国際協力

その一つとして、今年7月に実施されたのが、「コミュニティ主導の国際協力・日欧交流プログラム」である。これは、発展途上国の貧しいコミュニティとの交流に参加した経験がある日本とヨーロッパのコミュニティが、その経験を共有するためのプロジェクトであった。「市民交流時代の国際協力『CLIC』」(国際開発ジャーナル) 2002年2月号)の論文もある毛受敏浩氏(一財)日本国際交流センター)の

日欧交流プログラム 「コミュニティ主導の国際協力」

〈主催〉
ジャパンファウンデーション 欧州委員会 (財)日本
国際交流センター リンクス・ジャパン (英国)

〈各地域での共催〉
名古屋/ (財)名古屋国際センター 北海道/ (社)北方
圏センター、(社)滝川国際交流協会 横浜/ (財)横浜市
国際交流協会

〈参加者一覧〉
フィリダ・パーヴィス/ Phillida Purvis (英国)
リンクス・ジャパン代表
ニック・モリス/ Nick Maurice (英国)
英国ワンワールド・リンクング協会代表

ジョー・サング/ Joe Sang (英国) フレンズオブGAA会長
セレーナ・フォラッキア/ Serena Foracchia (イタリア)
レッジオ・ネルモンド プログラム・オフィサー
ピーター・スリッツ/ Peter Slits (オランダ)
公共政策コンサルタント・元IULA (世界地方自治体連合)ディレクター

リンクス・ジャパン/日英交流を実施する非営利団体。
主に社会福祉・地域再生・国際協力などを扱う
英国ワンワールド・リンクング協会/英国と途上国の市
民団体等のパートナーシップ樹立活動を推進
フレンズオブGAA/英国在住のケニア出身者のほか生活
支援のほか、ケニアにおける開発支援活動を実施
レッジオ・ネルモンド/イタリア北部のレッジオエミリ
ア市が設立した国際協力・国際交流組織。株式会社の形
態をとり、市の補助金の近い活動資金をEUや国連等から
外部調達して活発に活動



- 〈各地での公開セミナー〉
- 7月10日◆名古屋市
公開セミナー「地域と市民が担う国際協力：協働の視点から」
コーディネーター：塚田勝利 (愛知淑徳大学教授)
日本側パネリスト：丹下厚史 (名古屋国際センター交流協力課主任)
 - 7月12日◆北海道滝川市
地域主導の国際交流・国際協力を考える国際茶話会
 - 7月13日◆札幌市
公開セミナー
「市民交流時代における地域主導の国際協力と交流を考える」
日本側パネリスト：田村弘 (滝川市長)
 - 7月14日◆横浜市
公開セミナー
「地域と市民が担う国際協力：EUの経験、日本の経験」
日本側パネリスト：近田真知子 (地球市民の会かながわ事務局長) /
ペルナディア・イラワティ (アジア太平洋都市間協力ネットワーク
事業課課長)
 - 7月15日◆東京 (ジャパンファウンデーション国際会議場)
公開セミナー
「地域と市民が担う国際協力：EUの体験、日本の体験」
司会・モデレーター：山本正 ((財)日本国際交流センター理事長)
日本側パネリスト：熊岡路矢 (NPO法人日本国際ボランティアセン
ター代表) / 秋尾晃正 (グルニー・グループ代表)

上記で名前があがった方以外にも、各地での開催で以下の方
にお世話になりました。記して感謝いたします。
山内康裕氏 (社)滝川国際交流協会、町田真英氏 (北方圏セン
ター副会長・専務理事)、吉村恭二氏 ((財)横浜市国際交流協会理
事長)、村川昭子氏 (同活動支援課チーフコーディネーター)

が、これは二つの世
界大戦という対立を
経て、戦後が出した
答えであった。19
80年の「ブランド
報告」(ブランド元西
ドイツ首相を委員長と
するブランド委員会が
国連事務総長に提出し
た報告書「南と北
生存のための戦略」)

〈右下〉ニック・モリス博士によって提
唱されたマンゴーの木のイメージ。コミ
ュニティレベルの交流を象徴している。
マンゴーは常緑樹で、常に葉を落として
は、次の新しい葉を芽吹いている

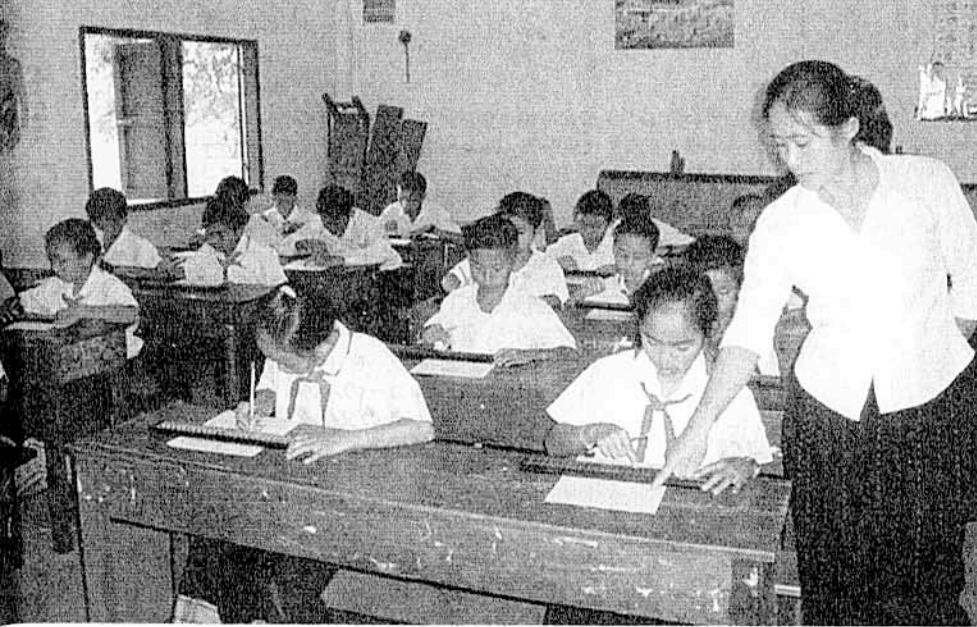
図版提供：Nick Maurice

着想、立案によるもので、リンクス・ジ
ヤパンは、ジャパンファウンデーション、
欧州委員会、(財)日本国際交流
センターの共催によるこのプロジェクト
のヨーロッパ側の協力団体を務めた。
EU各国でコミュニティ主導の国際
協力の最前線で活躍する5名の実務家
が訪日し、「南側(発展途上国)コミュニ
ティとの国際協力・国際交流に携わ
る関係機関への訪問やセミナー、ワー
クショップなど、1週間にわたるプロ
グラムに参加した。名古屋、札幌、横
浜、東京で公開セミナーが、また滝川
市ではワークショップが開催された。

EUの実務家たちが伝えたかったメ
ッセージはどういうものだったのだろ
うか？ それは、地域ごとの特性や関
心の違いはあるが、私たちは誰しもが
地域社会の一員であり、どのコミュニ
ティの内部にも、世界で今、起こって
いる出来事に関心をもつ人々がいると
いうことである。コミュニティは無数
の個人、団体・組織から成り立ってお
り、地方自治体、教育機関、医療機
関、宗教団体、スポーツ関連団体、さ
らには少数派民族が含まれている。そ
らの間にあつて、地域と世界を市民レ
ベルで結びつけること、そして地域的、
国際的な政策の立案や交流に、いかに
人々を巻き込むかが、国際協力の実務
家の腕の見せどころである、というこ
とである。

英国ワンワールド・リンクング協会
の代表、ニック・モリス博士によって
提唱された色彩豊かなマンゴーの木は、
国際的な連携(リンク)活動に参与す
るすべての人々が目指すところの、コ
ミュニティレベルの交流の健全なあり
方の特徴を如実に表わしている。マン
ゴーの木のように、それは深く根を張
り、長く生き続け、豊かに実り、再生
していく。常に緑に満ちて、その木陰
は安らぎの場を与えてくれるのである。
ヨーロッパにおける初期のリンクは、
主にヨーロッパ内の都市間の地方自治
体レベルで行なわれた姉妹都市関係か
ら発達していった

南北間の交流支援の変化



ラオス・ビエンチャン市のタバランセイ小学校では、日本のそろばんを使った授業が行なわれている。鳥根県仁多郡奥出雲町のそろばんを送ろう実行委員会が推進しているプロジェクトで、日本の家庭で眠っているそろばんの寄付を募り、職人が手入れたあと、タイやラオスに送っている

写真提供：奥出雲町国際交流協会
(そろばんを送ろう実行委員会)

を契機に、「北はさらに豊かになり続け、南はさらに貧しくなっていく」という現実が目向けられるようになり、リンクの相手は「南側」諸国に移っていった。さらに、主体も政府機関から民間機関へ拡大した。

南北双方を結ぶ人的交流やプロジェクトによって、人々は類似点、相違点を認識し、固定観念を乗り越えて、相互に学びあうことができた。当初は、

先進国であるヨーロッパ側が、その経験をパートナーである「南側」へ伝えようという意図で始まったものであったかもしれないが、すぐに、互いに学びあえることに気がついた。

このようなリンクは主に社会的、文化的な交流をめぐるものであったが、今日では、より社会構造に関わるような能力開発や、技術支援、人的教育などを伴うものが多くなっている。相手の顔が見えるもの、相手先のニーズに合致した実用性や専門的な内容をもつものが成功を収め、長続きしているようである。例えば、現在の自治体レベルで続

いているリンクのテーマは、都市開発や自治体運営、あるいは公衆衛生、ごみ処理、下水道などの公益事業、公共住宅設置に関するものが多い。

また、特にヨーロッパ側においては、自身の地域再生に資するような雇用創出や青少年事業の要素を盛り込んだテーマが多くなっている。英国では、「BUILD」と略称される国際開発協力への理解を呼びかけるネットワーク (Building Understanding through International Links for Development) があり、議会においても超党派の議員により「Connecting Communities」と呼ばれる会派が結成され、政治的な基盤も得て、活動を進めている。

相互に学び、恩恵を得る関係

各地のセミナーでは、日本側パネリストも、いくつか重要な指摘を行なった。第一点は、これまで日本の国際交流は、主に日本側が恩恵を受けることを目的とした対欧米の交流が主であり、ヨーロッパの初期のリンクと同様、主に社会的、文化的なテーマに沿って行なわれていたが、その一方で国際協力は、日本が教え、恩恵を与える側になるというように、国際交流と国際協力

は区別される傾向にあったということである。しかし、現在では、このようになりリンク活動に取り組むコミュニティは、国際交流と国際協力は同じものの二つの側面であり、恩恵もまた相互的であると理解し始めている。

このような国際的なリンク活動を行なった日本のコミュニティでは、人々はその経験から自信を深め、また個別分野での知識・技能の習得のみならず、より深い国際的理解と新たな友情を育む喜びを知るといふ成果が得られている。

二つ目は、日本の政府開発援助 (ODA) が減少している今こそ、緊急でなければ、地方自治体や地域コミュニティが国際協力に関与できる大きな機会が存在する、という点である。コミュニティのリンク活動は、多くの場合 NGO の活動と協力して進行しており、一般市民の NGO 活動への貢献は、ボランティア活動に加え、金銭的な寄付などがある。どのような貢献であったも、国連のミレニアム開発目標 (2000年9月に開催された国連ミレニアム・サミットで21世紀の国際社会の目標として採択された、平和と安全、開発と貧困、環境、人権とグッド・ガバナンス (よい統治)、アフリカの特別なニーズな

どの課題)の達成という世界の大きな使命に向けて力となるものである。

地域コミュニティとリンク運動

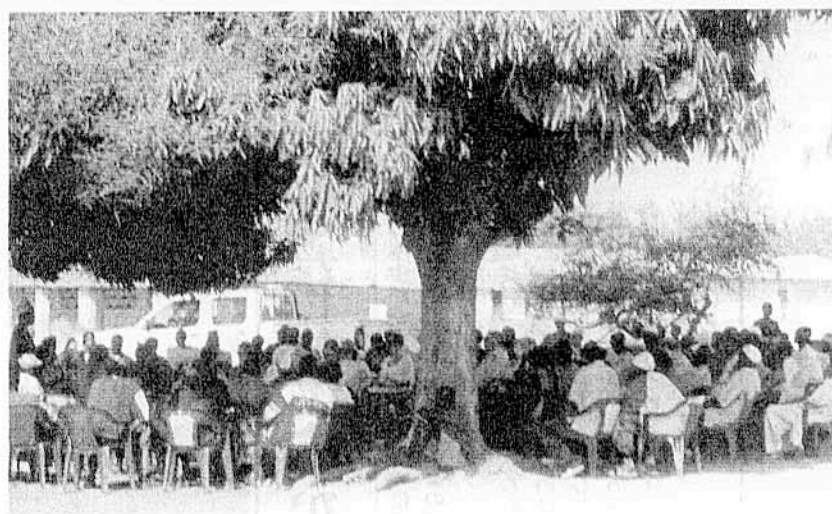
各地のセミナーにおいて、EUと日本双方のパネリストが繰り返し述べているように、世界が抱える問題は地球規模の性質や大きさから、すべての人々の関心と寄与が必要で、問題が国境を越えて非常に複雑化している場合、政府の力だけでは解決が望めない。地域コミュニティの住民たちは、毎日の生活のなかで直面する課題に対し、自分たちなりの解決策を探るようになっていく。それだけでなく、行政や民間企業からの協力や助言を得ながら、

他のコミュニティの人々とともに問題に対処していくこうとしている。

日本では、市民社会に対する理解が深まり、公共事業の実施に際し、行政の本格的なパートナーとして認知されつつあるだけでなく、地域コミュニティがNGOあるいは地方自治体と協力して、国際的な場へも、より広く関与していくという意識が明らかに高まっている。地域においては、個々の市民が積極的にコミュニティの課題に関与し、その延長で国境を越えて、地域の市民と連帯していくことができる。そのことで、人々の生活は、リンク活動の間も、それを終えたあとでも相互に豊かになっていくのである。

また、行政が、地域コミュニティや一般市民を巻き込むことで、過去の失敗例や限界のある手法から逃れることができる場合もある。そのようななか、国際協力機構(JICA)は、近年コミュニティのリンク活動の重要なため役として、そのような地域コミュニティを支援をしている。

リンク活動を成功させるためのもう一つの重要な要素は、トップダウンで意思決定を行なうのではなく、コミュニティの多くの人・団体が関与すること、そして、特に若い世代の参加を促すべきだということである。先進国において、開発教育は単独の教科としてではなく、カリキュラム全体にまたが



マンゴーの木は再生のシンボルであるばかりではない。大きなマンゴーの木の下にコミュニティの人々が集えば、臨時の集会場にもなる
写真提供：Nick Maurice

っていることが多いが、リンク活動は、青少年の貴重な教育機会となっている。また、発展途上国でのリンク活動は、貧困や飢餓の撲滅、乳幼児死亡率の低下、妊産婦の健康や識字率の向上、収入を創出するマイクロクレジット（小規模プロジェクト開始のための無担保小口融資）の提供などに多大な貢献をしてきた。しかし、何にもまして、ヨーロッパ、日本、どのパネリストたちも大きな声で発したメッセージは、「リンク活動はとにかく楽しい！」ということである。

リンク活動に対して異なる文化、歴史をもつ日本とヨーロッパ間で、その考え方、経験、よい実践例などを共有することで相互に啓発され、今回のプロジェクトは予想以上に貴重なものとなった。このプロジェクトに参画した人々は皆、この対話を継続し、さらに交流を深めていきたいと願い、そして今後はパートナーである「南側」コミュニティも一体となって参画していくべきだということまで一致している。

リンク活動がもたらすもの

アフリカが今後の議論や交流の中心となるであろうという予測が、多くの

方面からなされている。英国のブレア首相の肝いりで発足したアフリカ委員会のレポートには、アフリカの貧困と沈滞は我々の時代の最大の悲劇であると明記されている。今年、EUではアフリカを特に注目すべき地域と定めており、また、5月に英国のグレンイーグルズで開催された主要国首脳会議（G8サミット）でもアフリカは重要議題の一つに取り上げられた。

1990年代半ば以降、日本の対アフリカ向けODAが半減しており、日本のアフリカ諸国への新規借金の貸付額よりも、アフリカ諸国から日本への借款返済額のほうが現在は大きいという悪循環を脱却すべく、日本政府も積極的に新しい道を模索している。

しかしながら、先進国の技術革新は、アフリカをさらに不利な立場に追い込んでいく。技術大国である日本は、その技術を用いて、何らかの貢献ができるのではないだろうか。

同時に、アフリカの人々は慈善や援助を受けるだけの立場であることに不満を抱き、無力感も味わっている。彼らは自分たちで課題を設定し、開発への道をもに進む仲間として援助国のコミュニティから支援と連帯感を受け

取りたいと、むしろ願っている。そしてこれこそがコミュニティに根差したパートナーシップ、「コミュニティ主導の国際協力」が真の意味をもつ領域であり、常にこうしたパートナーシップを探り、展開するための新しい道を模索していかなければならないのである。

こうした交流を通じて、恵まれた国々のコミュニティは恵まれないコミュニティとの連帯を築いていくことができる。最も重要なことは、平等な人間同士としての長期的な関係を通して、他の文化への知識や理解を共有することと、交流に関与した人々は積極的な地球市民となっていく、その発言や直接的な行動によって変化をもたらす、同時に自分自身やコミュニティを豊かにしていくことができることである。

コミュニティのリンク活動はあらゆる面で相互に有益な活動である。同様に、今後この課題について日本とEUが交流を続けていくことは、これまでリンク活動に関与してきた人々にとって有益なものとなるだろう。このような分かちあいを守り育む者たちは、マンゴーの木のように、広く敬われ成長し続けていく果実をもって報われることになるのである。☺

（原文は英語）